

第1回新任教員セミナー報告

宮脇 正一

鹿児島大学大学院歯学総合研究科
健康科学専攻 発生発達成育学講座
歯科矯正学分野

期 日：2011年9月5日(月)~7日(水)
場 所：八王子セミナーハウス(東京都八王子市)
主 催：公益財団法人 大学セミナーハウス
共 催：社団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩

ズに見合った内容を持つ授業を構想し実施するための必要最小限の能力を習得すること。
・前期に実際に行った授業を基にして、後期のシラバスを作成すること。

はじめに

現在、大学においては、少子化等による大学全入時代を迎え、入学者選抜方法の多様化による平均的学生の学力や学習意欲の低下、学習に集中できない学生の増加、卒業生の資質に対する社会的要請の高まり、就職難による学生の目的喪失などのような解決が困難な問題が山積している。そこで、これらを解決するために、教員研修が盛んに行われるようになってきた。その研修の重要な課題の一つとして、授業開発があり、最近、以前のような知識・技能伝達型授業から、学生の学習意欲を高め、課題探求能力を育成する学生参画型授業へと移りつつある。しかし、本邦の教員において、このことについては十分理解されていないのが現状である。

大学セミナーハウスは、このような問題を解決するために、同じ悩みを共有する教員の相互研修すなわち大学教員相互の交流を図ることによって本邦の大学教育の向上・発展に寄与することを目的としており、今回初めて、(社)学術・文化・産業ネットワーク多摩との共催で、多くの大学であまり実施されていない合宿形式の新任教員セミナーが企画・実施された。そこで、この度本セミナーに参加する機会を得たので報告する。

セミナーの目的

- ・ユニバーサルアクセスの時代の大学教員にふさわしい教育方法を身につけること。
- ・所属大学(学部)の教育目的と受講学生の能力とニ

プログラムの概要

第1日目(9月5日(月))

13:00 開会の辞

- 大学セミナーハウス館長・新任教員研修セミナー運営委員長 荻上紘一
- ・大学教育に関する問題点と本セミナーの目的(前述)

13:20~14:30

講演1:大学の成長戦略を考える

- 文部科学省国立教育政策研究所長 徳永 保
- ・大学の成長限界要因は人口減少である(GDPと人口の伸び率は相関係数にある)。
 - ・日本の大学進学率はまだ低く、25歳以上の学生が占める比率はかなり低い。
 - ・国立大学の運営費交付金と私学助成が減少傾向にある(国の財政の行き詰まり)。
 - ・経済成長の鈍化と海外事業の進展による国籍を問わないグローバル採用の増加。
 - ・大学全体の在り方として、持てる資源の有効利用を図る必要がある。
 - ・大学改革の究極の目標は学部や学科等によらない学位プログラム化。
 - ・アメリカがWTOに高等教育サービスの自由化を提案(2000)。
 - ・日立グループがグローバル人事評価を採用(2011)。
 - ・学生を取り巻く社会:大学の準備対応不足(学外のことを知らない教員)と就活で露呈

するリアリティの不足あるいは欠如への対応としてアクティブ・ティーチング等による学生の主体的な学習の動機づけが必要。

- ・グローバル人材の育成のために、働く意思と力、多様性の尊重、コミュニケーション力(論理的な思考および表現力と英語力)、総合的なものの見方と異なる分野の知識を統合する技能が必要。

15:00~17:00 シンポジウム：現代学生論

1. 学生のニーズを引き出す

法政大学学生ステーション長・教授 木原 章

- ・現代学生の多様性と共通性。
- ・授業以外の学生とのふれあいにより学生のニーズが分かる。
- ・同規模他大学の学生サービスを参考にする。
- ・今の学生はほとんど勉強しない(自習時間：1時間未満が最も多い)。
- ・バイトもサークルもそこそこしか活動しない。
- ・学部指向性が低い(何かを学びたいと思う学生は少ない)。

2. 困難を抱える学生の理解のために一いま、私たちにできること一

明星大学学生サポートセンター長 村山 光子

- ・全国の大学における学生相談の内容で件数が増えている項目：対人関係>進路就職>発達障害56%>修学上の問題>精神障害>...等。
- ・学生相談に対応する組織：クラス担任、教員、事務員など。
- ・学生相談件数は経年的に増加している。
- ・発達障害の区別は困難であるため本人や両親の自覚はほとんどない場合があり、入学後トラブルになりやすい。
- ・発達障害の発現率は約6%であり、発達障害に早く気付くことが重要。
- ・発達障害の特徴：ノートやメモがとれない、語学は苦手、講義の内容が頭に入らない、レポートの提出を忘れる、同時に2つのことが出来ない、視線が合わない、荷物が多い、不器用、気が短い、誤字脱字が多い、思い込みが激しい等の特徴がある。
- ・発達障害のある学生には、図などを用いて説明すると良い。
- ・公表して周りの人の理解を得る。

- ・就職は困難であり、就職してもすぐクビになる者もいる。

- ・大学が取り組むべき課題：発達障害を有する学生への支援のPDCA cycleの活用が重要。

3. ハラスメント・フリーの学園生活を目指して 中央大学法学部・法科大学院教授 長内 了

- ・学生が敵になる可能性のある話。
- ・一人一人の努力ではダメであり、組織的対応が必要。
- ・ハラスメントの種類：セクハラ、パワハラ、アカハラ、モラルハラスメント。
- ・ハラスメントという用語の誕生：MITの学園生活における性問題報告書(1973)。
- ・名誉は以前から法律により守られてきたが、逆にプライバシーの保護がセクハラにつながる場合がある。
- ・日本におけるハラスメントは従来、耐え難い言動によりストレスを受けることといったあいまいな考え方だった。
- ・大学に求められる高度のモラル・スタンダードの確立により、大学構成員に対する防止啓発活動の重視と事後的対応システムの整備が可能となる。
- ・当世学生気質とハラスメント：あの先生はいやらしいとするボイコット運動等がある。
- ・大学は学生にやさし過ぎる(教員に厳しい)ため、教職員に対して理不尽な結果になることがある。
- ・学内機関は公正・中立かどうか重要であるが、実際には教職員に約8割厳しい処分が下っている。

17:15~19:15

グループ討論1：今どきの学生をめぐって

9班(私は1班)に分かれて、KJ法を用いて検討し、最後に発表した。

19:15~20:45

立食パーティー：(情報交換会、自己紹介等)
北海道~沖縄までの大学教員約60名。

第2日目(9月6日(火))

9:00~10:00

講演2：今どきの学生向けの授業，今どきの学生との関わりのために

首都大学東京大学教育センター長・副学長 上野 淳

- ・大学全入時代が到来し，以前とは異なり入試は学生の質を保証していないため，学生の質の低下が起きている。
- ・現代の学生の特徴：ひ弱（しかることを避け，もしもしかるならその2倍ほめる必要がある），能動的な学習姿勢の欠如，従来型講義（知識伝達型講義）の限界が起きており学生の約7割は半年前の講義内容を全く思い出せない（三宅2005），授業時間外に勉強しない（授業には出席する），本を読まない（教科書も買わない），企業は「意欲，行動力，コミュニケーション力」を重視しているにもかかわらず，学生は部活動やアルバイト等でアピール出来ると誤解している。
- ・対策として，受動的な授業から能動的学習への転換が必要である。
- ・学生の類型：とりあえず出席型34% > 不活発型22% > バイト専心型21% > サークル専心型11% > 自分の勉強型7% > 大学生本来型5%。
- ・問題発見能力（課題解決力）の養成が必要（基礎ゼミで実践した結果，他の講義より教員学生共に満足度が高く，実習も評判が良かった）。このことから，学生に何かをさせると満足度は高まると考えられる。
- ・教員は学生に授業時間以外にどれだけ勉強させるのが重要である。
- ・結論（重要ポイント）：双方向授業（常に質問や意見を促す），参考図書や論文を指示，学術最先端を分かり易く講義（研究の重要性），PPを用いた講義（毎年ブラッシュアップ），講義プリントの配布（穴埋めをさせる），可能なら毎回ミニテスト（感想も書かせる）と，最後に期末試験を行って授業時間外学習の促進と厳正な成績評価（シラバスに評価基準を記載）を行い，学生の授業評価を参考にして毎年ブラッシュアップする（PDCA cycleを確立する）。
- ・まとめ：分かり易くかつ魅力的な授業をすると，優秀な学生が研究室に集まり，研究がレベルアップされ，活発な研究活動が生まれる（法的には学位の授与が大学の役割であり，専門学校等との違いは研究にある）。すなわ

ち，教員と学生は共生の関係にあるということが今回の報告の最終結論である。

- ・論文（卒業，修士等）によって学生は真に育つ（理由：課題発見，文献検索，調査，実験，分析，考察等をするため）。
- ・問題点：現実的には，理想的な授業をする教員が少数，学生の評判は悪い（学生は安易な方向に流れる，Active learningや授業中の学生への指名はハラスメントとして受け取られることもあり，また課題を出しすぎると他の科目の先生からクレームが出ることもある）ので注意が必要。
- ・パワーポイントと板書のどちらが良いのかがよく議論になるが，パワーポイントを使って穴埋め部分を学生に書かせると良い。

10：30～12：00

講演3：授業の計画・実践・評価・改善

帝京大学高等教育開発センター長・教授
土持 ゲーリー法一

- ・北米ではFD centerではなくCTL (Center of Teaching & Learning) と呼んでいる。つまり授業改善にはTeachingとLearningの両方の視点が必要。
- ・FDで最も効果的なのは新任教員研修である（鉄は熱いうちに打て）。
- ・FDとはFood & Drinkである（教員同士のコミュニケーションを重視：ユタ州の名門私大BYU(プリガムヤング大学) お腹の空いている夕方にFDをするのは最悪である）。
- ・バイトをしていない優秀な学生を参加させたFD（シラバスに関するワークショップ）を行い多大な成果をあげた。
- ・シラバス(Course Syllabus)とは，授業の計画のことであり，教員と学生の契約書でもある。
- ・北米では，シラバス（授業のシミュレーション）の作成に6か月間かける。
- ・シラバスは学生のためのものであり，学生の学習に重点を置くとよい。
- ・トピックリストのコースデザイン（フィンク著「学習経験をつくる大学授業法」）。
- ・1単位として，教員には15回（試験を含まず）の授業をするよう文科省から指導されている。しかし，大学設置基準第23条には15回という表現はなく15週（学生の自学自習(学修)を含

- む) となっているため、学生の予習復習を促す(具体的には授業時間の2倍の課題を与える必要あり)ことが重要である。
- ・ 大学教授資格(教員免許)は無いが、大学の先生はもぐりという訳ではなく、説明責任(accountability)が求められる。
 - ・ 学生の集中力は24分で切れるので、授業開始24分後に能動的学習(個人・ペア・グループワーク グループ討論と発表など)やハワイ旅行が当たるスクラッチ・クイズなどをさせると効果的である。
 - ・ シラバスでは授業哲学(Teaching Philosophy)を明確にすることが教員の所信表明につながる。
 - ・ ポートフォリオは知識、技能、態度全てを評価することが出来、その評価法はルーブリックと呼ばれており、事前に学生に渡しておく。
 - ・ 北米では学生の授業評価に代わり、ティーチング・ポートフォリオ(49項目で教員評価)が目目されている。
 - ・ 学生のリフレクション(Reflection: 振り返り、省察)の時間を確保する。具体的には、最後の15分間で Reflection sheet を書かせ証拠資料とする。
 - ・ ポートフォリオは学生が何を学んだかを可視化出来るもので、ジョン・ズビザレタによると、3つの要素(リフレクション+コラボレーション(学生同士のメンターリング)+学んだことを証明する証拠資料)からなる。
 - ・ 学生の本音: 試験が無ければ(楽に単位がとれれば)良い授業。
 - ・ 試験: 我々は現在試験で学生の学んだことを調べている(後ろ向き評価)が、前向き評価が重要である。
 - ・ 理想的な授業: MIT方式試験(授業を疑問形で聞かせて学生に試験問題を作らせ、良問をピックアップして出題する)。これは、教室内授業(能動的学習: グループ学習・発表と授業を疑問形で聞くことにより、学生にとって授業は作問のために出席する)といい、教室外学習(自学自習: 指定図書課題とコラボレーション+スクラッチ・クイズ(満点 ハワイ旅行))と組み合わせてラーニング・ポートフォリオとする。
 - ・ 理想的な成績評価: 筆記試験30点満点+ポ

トフォリオ70点満点(内10点は出席点)

- ・ ポートフォリオ作成時にコンセプトマップ(1頁目)を書かせる。
- ・ 教員の授業改善にとって学生のポートフォリオはバイブル的存在。
- ・ eポートフォリオはワードやPPで作成する(現在、多くは紙媒体である)。
- ・ ユタ州の名門私大BYU(ブリガムヤング大学)では優等生に卒業ポートフォリオを提出させて、授業改善の参考にしている。
- ・ まとめ: 学生のための授業の改善(PDCA cycle)を学生と共に行う SCOT(Students Consulting on Teaching: 学生による授業コンサルティング 学生にお金を支払う)など。

13:30~14:30

私の授業(その1): 学生参加型の授業

日本教育大学院大学教授 林 義樹

- ・ 授業は学生が主体であるべきである。
- ・ 情報社会は、知識基盤社会である。教育基本法が62年ぶりに改定され参画教育が目標とされた。
- ・ 教育方法として欠かせないもの: 創造と伝承。
- ・ 参画教育の基本的考え方: 参集(いあわず)、参与(関わりあう)、参画(にないあう)
- ・ 授業方式の3類型 参集型授業: 講義(知識、伝達)、参与型授業: 演習(認識、交流)、参画型授業: クラスワーク(意識、創造)。
- ・ 参画活動の4エンジン: 個人史(人間力の発揮出来る信頼関係)、役割分担(組織力の基礎スキル)、事実力(生のテーマ)、情報力(IT等を用いた情報収集、ラベルワーク)
- ・ 参画体験で新しい学びのパラダイムが開ける(ほとんどの授業で実行可能)。
- ・ 参画戦略ツール: ラベルワーク(KJ法)を活用してポスター等にまとめたものを発表(問題提起)する。
- ・ 創造から独創へ。
- ・ ユニバーサル・アクセス時代の最大の教育課題: 学生参画型教育。

14:50~16:50

私の授業(その2): 大人数教室での効果的な授業運営方法

桜美林大学リベラルアーツ学群教授 荒木 晶子

- ・桜美林大学で一番人気のある先生（コミュニケーションの授業）で元アナウンサー。
- ・1回の授業で必ず行うことは、エクササイズ、挨拶、笑い、授業の最後の振り返り、厳正な出欠確認（遅刻者は遅刻席に座らせ、遅刻カードを渡す（20分以上遅刻は欠席、3回の遅刻で1回の欠席、学生のウソに負けないことが重要）であり、合否判定（成績評価）に使う。
- ・コミュニケーションは意味づけのプロセス（言葉はきっかけに過ぎない）。
- ・良い授業の秘訣：先生の頭の中のアイデアを、同じように学生の頭の中に構築すること、また、学生には様々な学習スタイルがあるのでそれに合わせることがポイントとなる。
- ・大人数授業の問題点：私語、うるさい、出欠確認や試験が大変であること。
- ・4つの学習スタイル：直接体験型 CE (Concrete Experience Feeling) 桜美林大学生の約50%、内省観察型 RO (Reflective Observation Watching) 約25%、試行実験型 AE (Active Experimentation Doing) 約15%、抽象概念型 AC (Abstract Conceptualization Thinking) 約10%
- ・直接体験型 CE (Concrete Experience Feeling) 学生の約50%：共感性に富む、直感的、ディスカッション等から学びたい（具体例から学びたい）ので、イントロ（つかみ）、グループ討論、ビデオ、エクササイズを活用すると良い。
- ・内省観察型 RO (Reflective Observation Watching) 約25%：観察力に優れる、内向的、物事をすぐに鵜呑みにしない、講義形式の授業等から学びたい（五感を通して学びたい）ので、グループ討論、チェックリスト、リフレクションシートを活用すると良い。
- ・試行実験型 AE (Active Experimentation Doing) 約15%：実体験から学ぶのが得意、外向的、ディスカッションを通して学びたい（受け身の講義は苦手）ので、ケーススタディ、デモを活用すると良い。
- ・抽象概念型 AC (Abstract Conceptualization Thinking) 約10%：論理的思考が得意、権威ある専門家から理論的なことを学ぶ（一人で学ぶ）のが得意なので、講義、課題、文献を

活用すると良い。

- ・良い授業の秘訣：常に学生（学習者）を見ながら授業を行う。4つの学習スタイルに合わせた授業、すなわち、1回の授業で高度な授業テクニックを次々に披露することと、教員の得意なスタイルを押しつけないことが重要である。さらに、皆に考えさせてから、言いたいことを述べることで、実践的なプロセスを取り入れた授業を行うために、目的やゴールを明確に提示し、実体験に関連性が見出せた時が効果的である。
- ・教員の資質：4つの学習スタイルを取り入れられる能力と、学習者にとって知的好奇心にあふれた学習環境を作り上げることの出来る能力（創造性）とそれを可能にするコミュニケーション能力が重要である。

17：10～18：40

ワークショップ：授業を描く

帝京大学高等教育開発センター准教授 井上 史子

- ・大学設置基準の改正(2008.4)：大学は授業方法（授業形態）、授業計画、成績評価基準、予習復習の指示、当該授業の履修によって形成される能力が何であるべきかについても予め明示する必要がある。
- ・授業は学位授与の方針に直結する組織的活動の一部である。
- ・シラバスには、到達目標（教育目標：合格の最低基準60点）と行動目標（学習後に達成される学習成果としての行動で、行為動詞で表現するために、上位目標を領域別（タキソノミー：認知的、上位的、精神運動的領域）、観点別に単文で表現する。
- ・各自のシラバス：ペアワーク シラバスの改善を行い、グループ内討論を行った。

20：00～21：30

グループ討論2：授業計画の発表

学生の理解を深めるための大規模授業(A-C グループ)、学生参画を促すための中規模授業(D-F グループ)：グループワーク(自己紹介、役割分担、KJ法によるまとめ)を行い、テーマ、対象学年、到達目標、授業内容（導入、展開、まとめ）についてグループ発表および討論を行った。

第3日目 (9月7日(水))

9:00~11:30

パネル討論：大学教員に必要な資質とは

司会：本セミナー運営委員長 荻上 紘一

- ・今回の参加者同士のつながり（人脈、ネットワーク）を活かして欲しい（名刺の活用）。
- ・常に前向きの姿勢が重要（常に積極的な方法を選択することが重要）。
- ・正しい用語：生徒ではなく学生，学生にさせる（して頂くはダメ）。

大妻女子大学社会情報学部教授 生田 茂

- ・教育実践学の研究（写真入り用紙と音声ペンをういた教育支援）。
- ・任期制の問題（研究も授業も短期間で出来ない）。

桜美林大学リベラルアーツ学群教授 坂井 昭宏

- ・大学教員は学生を巻き込んで研究し，学生に問題解決能力を身につけさせることが重要であるので，ライフワークとなる研究テーマを持つことが重要。
- ・大学と専門学校との違いは研究（知的探求）にある。

明星大学人文学部教授 菊地 滋夫

- ・東アフリカ沿岸地方の人々の暮らしや宗教に関する研究。
- ・学生から学ぶことが多い。

首都大学東京大学教育センター准教授 林 祐司

- ・論文がないので，言える立場にはない。
- ・どのように働くのかを考える上で，頑張り過ぎは良くない。

帝京大学高等教育開発センター准教授

井上 史子

- ・研究：教育工学，eラーニング，ITの活用。
- ・オランダの大学教授資格 UTQ の2年間のプログラムを受講した。
- ・教育，研究，社会貢献，管理運営の業務はキャリアステージに応じて変化する。

フロアからの多数意見：

- ・90分授業の場合20分は学生同士で話をさせる
- ・仕事の効率化：PP ファイルや教材の共有化，システム（上の責任）の改善等
- ・ワークライフバランスや Time management（研究と教育のバランス）が重要。大学では研究すべきであり，良い教育をするためには時間が必要である。しかし，無理は良くない。

11:30~12:15 講演4：新任教員への呼びかけ

明星大学学長 小川 哲生

- ・大学は学位授与機関（専門学校等との大きな違い）である。
- ・日本の大学教員は免許が必要ない 教育能力の評価は困難。
- ・教員は教えることが義務（給料の80%は学生の授業料による）。
- ・現在の授業形態：学生参加型が一般的。
- ・大学：ユニバーサル化，全入時代，学生にとってリターンが少ない。
- ・大学教員の資質：一般社会常識を有する人，相手を恨まない人（色々周囲から言われることが多いため）。

12:15~12:30 閉会，修了証書授与

おわりに

これまで私は，医学教育者のためのワークショップいわゆる富士研をはじめ数多くの教員研修，セミナー，ワークショップ等に積極的に参加し，教育に関する重要な知識や技能等を学んできたつもりだった。しかし，今回本セミナーに参加して，学生に能動的学習をさせる方法，4つの学習スタイルに合わせた効果的な授業テクニック，教員と学生は共生関係にあることなどの教員の資質・心構え，大学関連法令等に関することまで，幅広くかつ重要なことに関しては深く掘り下げて，学ぶことが出来た。したがって，教員の先生方には，是非ともこのようなセミナー等に参加して頂き，もしも参加出来ないのであれば，本報告から，授業のスキルアップ等のヒントを掴んで頂ければ幸いである。